



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



セピア(色)

セピア(sepia)とは、本来イカ墨を原料にした顔料、もしくはイカ墨そのもののこと。また、その顔料のもつ黒みの茶色も意味する。かつてモノクロ写真などにこの色のインクが用いられたために、古い写真は薄い褐色に色褪せた。それを見て昔を懐かしむことから、現在では懐古趣味をあらわす代名詞として用いられている。

なお、ギリシア、スペインやイタリアなど一部の国ではコウイカそのものを「セピア」という。

パパラッチ(の語源)

1960年に公開されたフェデリコ・フェリーニ監督のイタリア映画「甘い生活」。この映画に登場したカメラマンの名が「パパラッツォ」、あまりの猛烈ぶりが印象的だったので、有名人や芸能人をつけ回し、私生活などを記事として新聞や情報誌に売って生計を立てているカメラマンをパパラッツォの複数形・パパラッチと呼ぶようになったのである。

(蛇足ながら)この映画でトレビの泉で水浴びするシーンが話題になり、観光名所となった。



慣用読みとは？

言葉は時代とともに変化しているが、その代表例が「慣用読み」かも知れない。「慣用読み」とは元々の正しい読み方から、誤読されていたものが定着した読み方(または定着しつつある読み方)である。例えば「捏造」、今では大半の人が「ねつぞう」と読むが、元々は「でつぞう」が正しい読み方だった。こうした例は以下に示すように結構多くある。(左が元々の読み方、右が慣用読み)

| | |
|---------------|-------------------|
| 掉尾(ちょうび→とうび) | 攪拌(こうはん→かくはん) |
| 堪能(かんのう→たんのう) | 拱手(きょうしゅ→こうしゅ) |
| 稟議(ひんぎ→りんぎ) | 口腔(こうこう→こうくう) |
| 減耗(げんこう→げんもう) | 詩歌(しか→しいか) |
| 相殺(そうさい→そうさつ) | 早急(さっきゅう→そうきゅう) |
| 貼付(ちょうふ→てんぷ) | 漏洩(ろうせつ→ろうえい) |
| 端緒(たんしょ→たんちょ) | 執着(しゅうじゃく→しゅうちゃく) |



五里霧中

五里霧中を「ごり、むちゅう」と区切って覚えると、漢字で書く場合に「五里夢中」と誤りかねない。正しくは「五里霧」で一語である。中国の正史「後漢書」の一節に「能(よ)く五里霧を作る」とある。後漢時代の一里は約415mだから、五里は2kmあまりになる。張楷(ちょうかい)という人物がこの距離を見えなくする霧を作り出すことができる、と記述している。「中」は「あたる」の意であり、「五里霧」に「中(あたる)」と「現在の状況がわからず、先の見通しが立たない」状態になることから、「五里霧中」という四字熟語が誕生したわけである。

食指(が動く)

紀元前6世紀、中国・春秋時代の話である。鄭という国の君主、靈公が宰相である家臣の子公を食事に招いた。王宮へ向かう途中、子公の人差し指が突然ピクピクと動いた。同行していた子家に「見ろよ、この指が動くときはご馳走にありつけるぞ」と言った。

王宮へ着くと、美味しそうなスッポンスープが出ていた。得意満面の子公。そこへ靈公が登場、「なんの話じゃ?」。子家が「子公がご馳走が出る事を当てたんですよ」と説明した。ところが意地悪で皮肉屋の靈王は子公にだけ「スッポン料理を食べるな」と命じた。

これに怒った子公、いきなりスッポン鍋の中に人差し指を突っ込んで「ペロッ」と味見したあとサッサと帰ってしまった。

今度は靈公が激怒、「あんな奴は殺してやる！」

しかし、子公の方は靈公の動きを察知、子家と図り靈公を謀殺してしまったのである。

このエピソードから「食指」は人差し指の意味に、「食指が動く」は食欲が起こる意味となり、転じて、物を欲しがったり、興味・関心をもったりする意味になったのである。

それにしても食い物の怨みは恐ろしい・・・

独壇場と独擅場(どくせんじょう)

言葉は時代とともに変化するものだが、この「独壇場」は読みだけでなく書き方も変化した言葉の代表例である。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

「擅」は「せん」と読み、「ほしいままにする。ひとりで自由に処理する」という意味。この字を使った「独擅場」は「その人一人だけで、思い通りの振る舞いができるような場面・分野。一人舞台」の意味で、もともとの読み方は「どくせんじょう」だ。しかし、「擅」と「壇」の文字がよく似ていることから、「どくだんじょう」と誤って読まれるようになり、表記も「独壇場」が一般化してしまったのである。ただ、「独壇場」が定着した今でも大半の国語辞典は「独擅場」も掲載している。

「頌春」は何と読む？

年賀状で使われる『頌春』は、「新春をほめたたえる」という意味を持つ言葉だが、なんと読むのだろうか。

「頌」に「公」という文字が入っていることから「こうしゅん」と読む人がいるかもしれないが、「しょうしゅん」と読むのが正解。「賀春」とほぼ同じ意味だ。

「頌(しょう)」には「人の徳や物の美などをほめたたえること、また、ほめたたえた詩や歌」という意味がある。

